

第3節 関連資料

ニヤムレンゲの起源

ルワンダは、モハジ湖の付近に成立し、王宮を中心に徐々に支配地域を拡大していった。植民地期以前のルワンダ王国の成立と発展については、武内[2000]を参照。なお、その後に出た重要な研究書として、Vansina[2001]がある。

植民地期以前のニヤムレンゲの移動について、最も詳しく述べているのは、自身もニヤムレンゲの Mutambo [1997]である。ニヤムレンゲの中心的居住地であるキヴ州南部のイトンブエ (Itombwe) への移住について、彼は口頭伝承から3つの出自を挙げる。第1に、ニヤムレンゲを構成するクランの一つアバガビカ (Abagabika) の伝承である。その始祖セルガビカ (Serugabika) は、新たな放牧地を探し、乾季に現ルワンダ・コンゴ国境のルジジ (Ruzizi) 川を越えてイトンブエにやって来たという。その時期は特定されていないが、以下の2つの伝承よりも古いとされる。第2に、ニヤムレンゲを構成するクランの中では最大のアバニャビンシ (Abanyabyinshi) の口頭伝承である。彼らはビンシ (Byinshi) の子孫と自認している。ルワンダ人口頭伝承史家カガメ (Alexis Kagame) によれば、ビンシはユヒ・ガヒマ (Yuhi Gahima) 王の死後、後継者争いによって分裂した王宮の一方の家系を引き、ルワンダ東部を支配していたが、その後ルガンズ・ンドオリ (Ruganzu Ndoori) 王によって滅ぼされた。それに伴って一族は追放され、ルジジ川を越えて逃亡した。そこで、セルガビカの子孫と出会ったというのである。歴史家によって王の在位年には意見の差があるが、ルガンズ・ンドオリ王の在位年は16~17世紀とされている。第3の出自は、18~19世紀のユヒ・ガヒンディロ (Yuhi Gahindiro) 統治期の干ばつと飢饉による移動である。彼らは19世紀中頃にイトンブエに定住するようになったとされている (Mutambo [1997:18-23])。

地理学者のワイス (G. Weis) は、イトンブエには1881年以来ルワンダ系住民の居住が確認されていると述べている (Weis [1959], Willame[1997: 79])。ヨーロッパ人到来以前から、イトンブエにルワンダ系住民が居住していたことは間違いない。ただし、彼らが植民地期以前にどの程度の人口規模であったのかはわからない。植民地期の人口規模については、管見の限りワイスの調査があるだけである。彼はウヴィラ・ゾーンに存在する3つのチーフダムのうち1つ (バヴィラ : Bavira) しか調査していないが、そこではチーフダムの総人口2万4000人のうち5287人を「ルワンダ人 (Rwandais)」が占めていた。

イトンブエのルワンダ系住民は、コンゴ自由国時代の1906年には「トゥチ」として自律的な行政区分を与えられ、1910年にその区分を植民地当局から確認されている。しかし、その行政区は33年の行政合理化によって統合され、消滅した (Willame [1997: 84])。この措置は20年11月8日付のフランク (L. Franck) 大臣の回状に基づき、33年12月5日に執行された。19年の段階で、ウヴィラ県 (Territoire d'Uvira) には、9つの伝統的チーフダムがあった。ヴィラ (Vira) 人を対象とするモンボト (Momboto) ンゴに居住す

るルンディ人を対象とするリジキ (Liziki)、カティアングロ (Katiangulo)、ブミノリ (Buminuri)、ムガボ (Mugabo)、ニャムレンゲ (トウチ) 人を対象とするカイラ (Kayira) とガフトウ (Gahutu)、そしてフレロ人を対象とするニャムギラ (Nyamugila)、ルサカナ (Lusakana)、カブィカ (Kabwika) である。行政機構改革の結果、これらは3つのチーフダムに再編された。すなわち、主としてフレロ人が居住するニャムギラ、ルンディ人向けのキニヨニ (Kinyoni)、およびヴィラ人向けのモンボトである。南隣のフィジ県 (Territoire de Fizi) も、行政機構合理化によって、20年代半ばに大幅にチーフダムが削減され、26年には、ンガンジャ (Ngandja)、タンガニーカ (Tanganika)、イトンブエ (Itombwe)、ムタンバラ (Mutambala) の4つに減っていた (Mutambo[1997: 66-67])。こうした点から考えると、イトンブエにルワンダ系住民が植民地期以前から居住していたことは間違いないが、植民地期にはその存在は目立たなかったといえよう。

イトンブエに最初に入植したのがルワンダ出身者であったにせよ、その後この地域には他からも移民が流入し、混淆が見られたようである。ルワンダ以外にも、植民地化以前にブルンディやタンガニーカからイトンブエに移民が流入し、またブカヴ付近のシ人や、コンゴ自由国軍を逃亡したテテラ人もこの地にやってきたという (Mutambo [1997: 41], Willame [1997:79-80])。したがって、彼らは「トウチ」だけではないし、「ルワンダ人」と同一の社会構造とはいえない。この点で、ムタンボはニャムレンゲのエスニックな独自性を強調している。彼によれば、ニャムレンゲの言語は、ルワンダ語 (キニャルワンダ)、ブルンディ語 (キルンディ)、およびその他の地域言語 (特にフレロ人の言語であるキフレロ) が混ざったものである。また、ニャムレンゲにあって、ルワンダやブルンディ本国には存在しないクランもあるという (Mutambo [1997:42])。

しかし、ムタンボのようにエスニックな独自性を強調するのは、逆にいえばそれが周辺から認知されていないからでもある。実際、「ニャムレンゲ」という呼称が出現するのはコンゴ独立後のことだし、それはムレンゲという地名に「人々」を意味する接頭辞 (banya-あるいは munya) を冠したものに過ぎない。すなわち、「バニャムレンゲ」とは、「ムレンゲの辺りに住んでいる人々」を意味する。1960年代半ばに現れたその名称は、彼らを「ルワンダの難民 (トウチ) と区別するために用いられた」 (Willame [1997: 83]) といわれている。59年にルワンダで勃発した「社会革命」によって周辺国に流出した難民が、イトンブエにもやって来るようになり、東部反乱における立場の相違もあって、ルワンダ人とは別の集団であることを強調する必要性に迫られたと言えよう。事実、研究書においても、Cosma[1997]などは、ニャムレンゲをほとんどルワンダ人と同一視している。

東部反乱とニャムレンゲ

1964年、コンゴではルムンバ派の政治指導者らによる反政府武装闘争が各地で勃発した。ムレレが率いる勢力がクウィルで反乱を起こし、東部のウヴィラでもスミアロ率いる武装勢力が活動を開始する。シンバと呼ばれる反乱勢力は東部で支配地域を急速に広げ、

8月にはスタンレーヴィルを制圧するに至った。

この内戦以前、ニャムレンゲ（まだニャルワンダと呼ばれることが多かった。ニャルワンダとは「ルワンダ人」の意）と地元部族、特にフレロ人との関係は良好だった。スミアロと、ウヴィラの有力者マランドゥラ（Musa Marandura）の反乱が勃発したとき、イトンブエの人々はそこから距離を置いていた。ただし、若者の中にはその解放軍（APL）に参加する者もいた。ルワンダのトゥチ難民は APL のウヴィラ制圧にあたって重要な役割を果たしたが、マランドゥラは自分たちが政権を樹立したときにはルワンダの再征服を支援すると約束していた。スミアロとマランドゥラの取り巻きにはトゥチ難民が多かった。スミアロは、カザヴブ、カイバンダ両政権の打倒を目標に掲げ、UNAR の指導者ルケバと協力関係にあった。

APL がフィジやウヴィラ近くの山岳地帯でゲリラ戦を行うようになると、ニャムレンゲは政府側につくようになる。ゲリラがニャムレンゲの財産や牛を掠奪し、被害を被ったことがその理由だった。反乱軍には、ベンベ、ヴィラ、フレロなどのエスニック集団が多かったため、ニャムレンゲとこれらのグループとの間に緊張が高まった。

この時代、ニャムレンゲのような牧畜民は、農民やプランテーション労働者よりも裕福であり、また中央政界にトゥチの有力者がいたことから、その保護も受けていた。主としてルンディ人のフトゥが居住していたルジジ平野においても、ニャムレンゲがチーフに任命されることがままあったという。また、反乱軍掃討のためのコンゴ軍に入隊したニャムレンゲが多かったことから、彼らの経済力が増大したとの見方もある。

この時期、ニャムレンゲの中にはモバやカレミエ方面に移動し、パニャヴュラ（Banyavyura）と呼ばれるようになった者もいた。彼らは、ずっと以前からコンゴに居住していた集団と、1959年以降ルワンダから亡命してきた集団から構成されていた。

（以上。Willame, pp.82-83）

1964年4月15日のウヴィラ襲撃事件は、マランドゥラ、ルモンゲ（Rumonghet）、ビダリラ（Bidalira）を指導者とする、フレロ人とベンベ人の若者約600名が起こしたものだ。1ヶ月後、ウヴィラはフィジを本拠とする反乱軍の手に落ちた。反乱はすぐさま、報復戦争の様相を呈した。反乱軍は、ナショナリストでないと思われた人々を攻撃しはじめ、サランバ（Mtaka Salamba）、ヌンドゥ（Issa Nundu）、キロジ（Ali Kilozi）などの伝統的首長が公開処刑された。また、保守的でベルギーに近い政党 PNP のシンパだと見なされた知識人層も彼らに襲撃された。

マカイナ（Makaina）村のバシムキンジェ（Bashimukindje）の人々のうち、教育を受けた者たちは、反乱軍に加わった近隣クランの出身者によって、残らず殺害された。休暇で村に帰っていた中等学校の学生が、反乱軍によってにわたりのように喉を掻き切られたのである。生首が村の中を引き回され、遺族には葬儀を執り行うことも禁じられた。筆者はこの時13歳で、マカイナ村から10Km弱離れたマランダ（Malanda）村にいた。殺された学生とは顔なじみだった。この事件が引き起こしたパニックは甚大で、周辺地域の学生は数週間の間森に身を隠した。身を守るためには、反乱軍の「革命運動」に加わる

しかなかった。

ニャムレンゲが、ベンベやフレロとともに反乱軍に加わったのは、「革命」の解放思想に同調したからではなく、家族やクランの身を守るためだった。反乱軍の幹部となったニャムレンゲの中で有名な者としては、フィジ・ミネンブウェ地区 MNC 議長のルシンギズワ (Rusingizwa)、APL 司令官のガキングエ (Gakingiye)、ビダリラ (Louis Bidalira) 少将 (major-général) の秘書官だったルダガ (Rudaga) などがいる。

しかしながら、APL においては、フレロ人とベンベ人が、幹部、士官、そして兵士の大部分を占めていた。これらのエスニック集団出身の APL 幹部としてマランドウラ、ンダロ (Ndalo)、ムチュング (Muchungu) などがおり、士官としてはビダリラやザブロニ (Zabuloni) などがいる。

APL が制圧したルジジ平野が ANC により奪還されると、APL はイトンブエ台地に退却した。イトンブエには、ベルギー人のリガ (Riga) が経営する農場 ELIT (Elevage de l'Itombwe) があり、1万 2000 頭の牛を飼育していた。しかし、リガはムレレ派によるウヴィラ制圧の報を聞いて逃亡していたため、イトンブエにやって来た APL は ELIT の牛を処分し、さらにニャムレンゲに対して牛を供出するよう命じた。ニャムレンゲがこれを拒否すると、牛は掠奪された。こうしてニャムレンゲの反乱軍に対する敵愾心が募ったのである。

その後、あらゆるニャムレンゲ人は PNP のシンパと見なされ、ベンベ人とフレロ人はムレレ派ということになった。ベンベとフレロは、ニャムレンゲへの攻撃、掠奪を行い、ニャムレンゲは自衛のために ANC に協力した。ANC は、ムレレ派掃討のために、イトンブエの住民を既に平定作戦が完了したルジジ、バラカ、カレミエ、モバなどへ移動させ、イトンブエに残った人々を反乱軍と見なして攻撃した。また、バラカに駐屯していたヴァメル (Vamer) 大尉は、ニャムレンゲに小火器、重火器を与え、ANC の補助要員として利用した。さらに、ウヴィラ駐屯基地の司令官は、武装したニャムレンゲ人をイトンブエに送り、そこで ANC 部隊のための「安全地帯」を構築させた。

ANC に協力したニャムレンゲは、イトンブエで治安を確立し、1967 年頃にはそこに戻って居住することができるようになった。これを見たベンベ人の間にも、反乱軍への支持を止める動きが広がった。しかし、エスニック集団間の不信は根強く残った。それまで共生していた人々の間に敵味方の感情が生まれたのである。

(以上。Mutambo, pp.82-86)

1996 年に南部キヴで生じた事件は、ニャムレンゲと近隣部族との長年に渡る不信に基づいている。いわゆる「ムレレ派」の反乱 (訳注: APL による反乱のこと) と ANC による掃討以来、その不信は継続していた。

1966 年、カロリ・ムシシ (Karoli Mushishi) に率いられたニャムレンゲは、ウヴィラに近いガフィンダ (Gafinda) でビダリラ將軍率いるムレレ派を攻撃した。当初、ニャムレンゲは、ウヴィラやフィジの大部分の人々と同様、反乱軍側に参加したのだが、傭兵に

敗北した反乱軍がバニャムレンゲの牛を掠奪するなどしたため、反感を募らせるようになったのである。

ニャムレンゲはそもそも総じて政治的関心が低い人々だった。この時期、ムレレ派武装勢力を指導していたチェ・ゲバラは、イトンブエの牧畜民について、近隣のバベンベやバフレロと異なりムレレ派の呼びかけにも無関心だし、カバンバ政権打倒を目指すルワンダ人ツチ難民のような民族的忠誠心もないと述べている。

反乱軍がイトンブエを掠奪したため、ニャムレンゲの多くはルジジヤバラカなどへ移住を余儀なくされ、栄養不良や病気のためにその難民キャンプで命を落とす者も続出した。カロリ・ムシシは、1966年にムレレ派との最初の戦闘で死亡したが、彼は敵との戦いを選択した最初のニャムレンゲであった。

1969年、ルジジ平野でムヒンダニ (Stephan Muhindanyi) がニャムレンゲの青年武装部隊を組織した。それは、モブツに忠誠を誓う部隊であった。この勢力はイトンブエ台地を迅速に制圧し、人々は難民キャンプから故郷に戻ることができた。しかし故郷では破壊がひどく、牧畜は一からやり直さねばならなかった。ニャムレンゲの部隊は、その後大部分が ANC に統合された。

ムレレ派の反乱勢力はコンゴからほとんど掃討されていたが、残った活動領域がフィジ、ウヴィラ、ムウエンガ (Mwenga) など、ニャムレンゲの居住地域と重なった。ここでは、中央政府を支持するニャムレンゲと、反乱軍を支持する他の部族との間で対立感情が深まった。

1970年には、ニャムレンゲ出身の議員ムホザ・ギサロ (Issac - Frédéric Muhoza Gisaro) も現れた。しかし、ニャムレンゲと周辺部族との間の軋轢は残存した。

(以上。Ruhimbika, pp.15-17)

APL の構成

1964年7月以降、東部コンゴに明確な軍事エリートが出現した。APL が形をなすのは、64年6月前半にフィジで3つの部隊が3人の指揮官の下に作られてからである。すなわち、カリシベ、チョンバズ、そしてオレンガであるが、彼らはいずれもテテラ - クス人であった。もともとスミアロが彼らを任命したが、7月下旬にはオレンガが支配的な権力を手中にした。反乱軍の士官にはめだってテテラ - クスが多かったが、これはかつて ANC に勤務していながら、ルムンバと同じエスニック集団だとの理由で追放されたためである。多くの士官が似た境遇を持っていることは団結を強めたであろうが、反面テテラ - クスの居住地域であるマニエマ以外の地域出身者への不信を募らせたかも知れない。

一般兵の構成は多様だったが、当初は特定のエスニック集団に強く依存していた。とりわけ、ベンベ人、フレロ人、そしてルワンダのツチ難民が多かった。反乱軍がマニエマを通して進軍するにつれ、その他のエスニック集団も増加した。特に、カバンバレのングバング (Ngubangu) 人とカソングのジンバ (Zimba) 人が多かった。進軍とともに兵力は雪だるま式に増加したが、基本的にそれはマニエマを地盤とする軍であった。

(Young, pp.232-233)

東部反乱と地方権力闘争

地方権力闘争と反乱との相互作用についてフレロ人の例が挙げられる。フレロは比較的中央集権的な政治形態を持っており、大湖地域の多くの王国と同様、王族カーストを有していたが、ベルギーの統治時代にこのカーストは支配権を失った。植民地期末期、伝統的な役職の機能を根拠として権力強化を狙った「バフレロ首長領」ムワミ（王）のシンバ（Henri Simba）は、当時ウヴィラ地域での組織化を目指していた戦闘的ナショナリスト政党 Cerea および MNC ルムンバ派青年部と敵対関係になった。この戦闘的なグループにおいて、最も有名なフレロのスポークスマンはマランドゥラで、彼はこの地域から州議会議員（provincial councillor）に選出されていた。

1961年の初頭、ブカヴでカシャムラとオマリの体制が成立すると、シンバはブルンディに逃亡し、マランドゥラは自分が首長領の「大統領」に就任したと宣言した。マランドゥラはすぐさまシンバ派のチーフを更迭し、自分の取り巻きで代替した。しかし、61年半ばにミルホ（Jean Miruho）が権力を握ると、シンバがムワミの座に復帰し、マランドゥラ派を放逐した。63年末までに、マランドゥラは息子のアントワンヌ（Antoine）の手を借りて、60年当時の「青年部」の再組織化を図り、63年末にはシンバ派の要人に対して散発的な攻撃を行うようになっていた。スミアロは既にマランドゥラとの接触を始めており、64年初頭にブジュンブラから反乱を組織する際に、マランドゥラの地域権力をめぐる野心とCNLの活動とを結びつけることは何ら難しいことではなかった。（Young, pp.234-235）

反乱軍のシンボル

コンゴにおいて最も重要な政治シンボルは、ヒーロー、エスニックなラベル、そして政党であった。反乱軍にとって最も顕著なヒーローのシンボルは、殉教者としてのルムンバ、そして生きる伝説としてのムレレであった。1960年当時、コンゴの北東部において、ルムンバは独立の希望を具現する人格であった。東部コンゴの反乱軍の教義には、ルムンバとルムンバ主義の名が散りばめられていた。64年に発行された党員証には赤い斑点があり、それは聖なるルムンバの血の象徴であった。ルムンバ主義の中心性が反乱軍の境界を明確に示している。60-62年にエリザヴェトヴィルのチョンベ体制に立ち向かったカタンガ北部は、64年には静かだった。これはルムンバ主義をはじめとする反乱軍のシンボルが共感を呼ばなかったからである。カサイ州でも、ルバ人がルムンバに対して敵意を抱いていたために、反乱は拡大しなかった。ルムンバのシンボルは東部の反乱に特異なものであり、同時に反乱が勃発したクウィルでは用いられなかった。

ムレレというシンボルはこの反乱で新たに生まれた。クウィルにおいて、彼はカリスマ的なゲリラ指導者であり、同時に予言者的、超自然的能力を持つと見なされていた。東部コンゴでは、ムレレは人間というよりも普遍的なパワーを意味した。反乱軍は戦闘で、

「ムレレ・マイ！ムレレ・マイ！（「ムレレの水」の意）」と叫んだが、これはムレレという生き神の恐るべきパワーを部隊に与え、不死身にするためのものであった。グベニエが8月に東部コンゴに着いたとき、APLに対して「ムレレ・マイ」ではなく「ルムンバ・マイ」と叫ぶよう命じたが、あまり顧みられなかった。

政党のラベルも反乱軍の境界を示すメカニズムを持った。クウィルでは、ムレレの反乱軍がPSA ギゼンガ派を支持する地域と概ね同じところで活動していたため、政党シンボルはあまり利用されなかった。また毛沢東思想という新たなシンボル体系を有していたムレレには、1960年のシンボルは必要なかった。他方、東部において、政党ラベルは友敵関係を明確に示した。MNC/Lは反乱軍の主要な政党シンボルであり、身の安全を守るために党員証を買うことは必要不可欠だったし、キンドゥ、スタンレーヴィル、イシロ、ブニアなどで反乱軍が設立した「州政府」で仕事を得るには、以前から入党していることが必要条件だった。60年にMNCと連立を組んだキヴのCereaやカタンガ北部のバルバカ党は、補助的なシンボルとして使われた。敵と見なされたのはPNPで、PNPのシンパは60年5月の選挙の際にはルムンバ支持地域では大方駆逐されていたが、反ルムンバ勢力の同義語として、パージや処刑のためのラベルになった。前首相のアドゥラが設立しようとした短命の全国政党連合（Radeco）も、PNPと同様の意味を持った。

エスニックなラベルも紛争のシンボルとしてきわめて重要である。認知プロセスにおけるエスニシティの重要性は、反乱という抽象的な事象を「Xグループが蜂起した」という特定のメッセージに変換することであり、それによって反乱への対応を決めるところにある。それは、「Xグループ」によって自分たちが脅威を受けているかどうかにある程度依存している。

クウィルにおいて、ムレレ主義はンブング人とペンデ人の運動と見なされた。とりわけ初期には様々な小グループが運動に加わっていたが、こうした認識枠組は変わらなかった。カタンガ北部において、反乱軍は主としてベンベ人からなり、ルワンダ人難民とフレロ人がそれに加わった。マセンゴ（Ildephonse Massengo）やカピラなどルバ人の指導者も参加していたが、カレミエに短期間成立した政府は、現地のエスニック集団に根ざしたものではなかった。カレミエで最も人口の多い集団であるトゥンブエ（Tumbwe）は、地方政治の権力闘争には関係を持たず、全くそこに参加しなかった。センドウェやムワンバ・イルンガ（Mwanba-Ilunga）などルバ人の指導者も、反乱軍も、彼らにとっては同様に関係なかったのである。

キヴとマニエマでは、フレロ、ベンベ、ングバング、ジンバ、クス - テテラといったエスニック集団が積極的に参加した。レガ（Rega）人は、ムウェンガではベンベ人と、カソングではジンバ人と、キンドゥではクス人と敵対関係にあり、反乱軍に対しても敵対的な立場をとった。オレンガの軍隊はマニエマの出身者が中心であったため、キヴで人口の多いエスニック集団であるシ、カバレ（Kabare）ングウェシェ（Ngweshe）はそれに抵抗した。北キヴにおいて、地方政治の中心は、ルワンダ人移民とナンデ（Nande）人の角逐であり、ゴマヤルツルの土地をめぐる問題であった。ルワンダ人移民が反乱軍に親和

的であったため、ナンデ人はこれに脅威を抱いた。マニエマの北部では、クム (Kumu) 人が当初反乱軍に参加した。クムではキタワラと呼ばれる宗教運動が盛んであり、植民地政府と独立直後の政府がこれを抑圧したが、反乱軍は初めのうちこれを認める政策をとった。これがクムを反乱軍に参加させる契機となった。しかし、APL 指導部は次第にキタワラ運動に敵対的となり、それとともにクムの支持も消失した。そのとき、ANC は容易にクムの居住地域を再制圧したのである。

東部の反乱において、中核的な役割を演じたのがテテラ - クスというエスニック・ラベルである。植民地期の初めからテテラ - クスの神話が発達した。アラブ人奴隷商人のティップ・ティプ (Tippu Tip) は、自著『ウテテラのスルタン』("Sultan of Utetera") において、カソongo・ルシエ (Kasongo Rushie) からマニエマ王国の鍵を受け取ったと主張している。カソongo、ニャングウェ、キボンボ、スタンレーヴィルといったスワヒリの前哨基地に滞在し、ベルギー人から「アラブ化された者たち (arabisés)」と呼ばれた自由人 (wangwana) の多くは、テテラ - クスの出身であった。ティップ・ティプの伝説的な士官であるルテテ (Ngongo Lutete) は 1892 年にコンゴ自由国軍と同盟関係を結んだが、彼の部下の多くは植民地公安軍 (Force publique) に参加した。1895 年のルルアブルグ、1897 年のイトゥリの森という植民地初期の 2 つの大きな反乱は、「テテラの反乱」と呼ばれた。このグループは植民地期に居住地を分割され、マニエマに住むものが「クス」、カサイのサンクルに住むものが「テテラ」と呼ばれるようになった。1960 年 3 月に開かれた会議において、テテラとクスは文化的な統一性を主張し、自分たちの息子であるルムンバへの支持を確認している。彼らが東隣のモンゴ (Mongo) グループとの親縁性を持つことが、この年に MNC ルムンバ派青年部がそこで成功する要因となった。1964 年の反乱が始まると、反乱軍のエリートはテテラ - クスと同一視される傾向が強まった。グベニエはブア人だったが、スミアロとサビティ (François Sabiti) はクス人であった。キンドウの州政府指導部 12 人のうち 8 人がテテラ - クスだった。グベニエは、テテラ - クスが反乱軍指導部を独占する傾向に警鐘を鳴らしたが、特にコンゴ北東部では反乱軍が地元出身者で構成されない傾向が顕著だった。

東部の反乱軍におけるテテラ - クスのプレゼンスは大きかったが、奇妙なことにその本拠地であるサンクルでは反乱軍への支持はそれほど強くなかった。サンクルの地方政治は、テテラ人の 2 つのグループ　サバンナ中心に居住するテテラ・エスワ (Tetela "Eswa") と森林部中心のテテラ・エコнда (Tetela Ekonda)　とが対立・競合する構図であった。1963 年には両者の対立からロジャ (Lodja) の町が大部分焼き払われる事態に至っている。こうした事件が尾を引いて、反乱軍に対する統一的な対応ができなかったのである。(Young, pp.236-240)

東部コンゴ反乱指導者間の関係

反乱軍の主要な指導者としては、グベニエ、スミアロ、オレンガ、ボシュレー・ダ

ヴィッドソン (Bocheley-Davidson)、ムレレ、ギゼンガなどがいた。グベニエは出身地ウェレで圧倒的な支持を受け、また独立前に住んでいたスタンレーヴィルで人気を博していた。スミアロは、キンドゥを中心、南キヴやカタンガ北部でも支持を得ていたが、スタンレーヴィルに住んだことはなく、そこではグベニエの陰に隠れる存在だった。サビティはスタンレーヴィル都市部でのみ人気があった。ボシュレー・ダヴィッドソンはブラザヴィル亡命者の間でこそ人気があったが、東部コンゴでは他の政治家に全く及ばなかった。

反乱軍は、個人的ライバル関係に基づくバラバラの組織だった。ムレレの反乱軍は自身の組織化を進めており、他の集団とは全く繋がっていなかった。ブラザヴィルの CNL は、設立の 1 ヶ月後にはグベニエ派とボシュレー・ダヴィッドソン派に分裂した。スミアロはブジュンブラで工作を開始し、東部 CNL (CNL-East) を設立したが、1964 年 9 月に革命政府が樹立されて以降はグベニエとスミアロの関係は急速に悪化した。グベニエはスミアロが革命政府の権威に服従するべきと考えたのに対し、スミアロの側は東部 CNL が自律的な組織だと主張したのである。さらに、スタンレーヴィル政権の樹立と時を同じくして行われた OAU サミットで、ボシュレー・ダヴィッドソンは CNL ブラザヴィル本部のみがコンゴ革命を代表するのであり、グベニエはそこから除名されたと主張した。そのうえ、シンバによるスタンレーヴィル制圧の直後から、MNC ルムンバ派青年部が再び出現した。これは、ベナンガ (Victor Benanga) とイフェフェコ (Gustave Ifefeko) の 2 名に率いられた組織だった。そして、オレンガ率いる人民軍はまた別の組織体だった。

反乱軍の組織は、運動が衰退しはじめるとさらに複雑なものとなった。国外で様々な指導者が勝手な活動を行ったからである。1965 年 4 月、スミアロはカイロに革命最高評議会 (Conseil Suprême de la Révolution) を設立し、ユンブ (Gabriel Yumbu) など CNL ボシュレー・ダヴィッドソン派のメンバーを加えたが、グベニエとオレンガはそこから排斥した。ボシュレー・ダヴィッドソン自身はこの時期グベニエと和解していた。ギゼンガの盟友で前 ANC 士官のパカサ (Vital Pakassa) 大佐は、グベニエ陣営とも連携していたが、カイロでスミアロ派の人物に暗殺された。ギゼンガは、1964 年 7 月にチョンベによって釈放されたが、CNL に加わらずに独自に「統一ルムンバ党」を組織した。66 年 9 月にグベニエはカイロで「コンゴ革命戦線 (Front Congolais de la Révolution)」を設立し、亡命勢力から一定の支持を得た。コンゴ国内に残った反乱勢力は、グベニエ派、スミアロ派、ギゼンガ派のいずれかから資金援助を得た。(Young, 240-242)

スミアロ派のカレミエ支配

1964 年 6 月にカレミエはスミアロ派によって制圧された。カレミエは反乱軍が最初に制圧した重要な町であった。スミアロはカレミエに住んだことがなかったため、そこに彼流の個人支配を打ち立てようとし、一日中人々の要請や不満を聞いて過ごした。しかしこうした方法で町を統治することはできず、1 ヶ月少しすると町は全くの混乱状態に陥った。証言によれば次の通りである。「カレミエには全く権威というものが存在しない。反乱勢力

はスミアロの命令など聞かないし、そもそもスミアロはキンドゥウに行って、不在である。大佐、特別支部長、警部など、誰もが好き勝手な肩書きを自称している。これはほとんど完全なアナキーであり、若者の盗みと掠奪を助長している。」

(Young, p.243)

反乱軍によるスタンレーヴィル支配

シンバがスタンレーヴィルを制圧した直後は、その興奮から銀行、会社、商店が襲われ、現金が奪われた。それから反乱軍の権威を担ったのは「青年部」だった。それは不良・ごろつきの支配であり、PNP のレッテルを貼られた者に対する復讐劇であった。グベニエの下で革命政権が樹立されると、より年長の世代がコントロールを奪回しようとした。この段階では、以前の行政システムを回復させようとの試みが見られた。(Young, p.243)

ルワンダ難民勢力の分裂と衰退

社会革命の後、UNAR (植民地期末期のルワンダで、トゥチのチーフを中心に結成された政党)のメンバーの多くは国外に亡命した。UNAR には、旧ルワンダ王国の秩序が持ち込まれ、その指導部はほぼかつてのチーフであった。また、チーフの間に存在した派閥がそのまま持ち込まれたため、分裂傾向が強かった。UNAR には、王のリネッジであるニギニヤ (Nyiginya) の血を引く王党派グループと、進歩派グループとが存在した。独立直前におけるトゥチ指導者層の課題は、体制を「トロイの木馬」方式で内側から打倒するか、外部から攻撃して倒すかという問題だった。前者の戦略を主張する国内の指導者と、後者の戦略を主張する亡命指導者との関係は悪かった。カイフラ (Michel Kayihura)、ルワンゴンプワ (Joseph Rwangombwa)、ムンガルリレ (Pierre Mungalurire) といったチーフが自発的に亡命した 1960 年には、UNAR 内部の分裂が既に目立つようになっていた。亡命指導部は地方選挙のボイコットを決めたのに、国内支部はそれに従わなかったのである。こうした不一致が深刻なものだったことは、例えば 1962 年 3 月 19 日付のンザムイタ (Jovite Nzamwita: 亡命した UNAR 指導者の一人) が、ルテランドンゲジ (Ruterandongezi) 神父に宛てた手紙にも表れている。彼は、カイバンダ政権と和解するというルワガサナ (Michel Rwagasana) の主張に対して、ルワンダ国内で運動してもベルギー軍とカイバンダに抑圧されるだけだとして、亡命の必要性を訴えた。

亡命した指導者も一枚岩ではなく、3 つの主要なサブグループが存在した。第 1 に「王党派」であり、王宮との強い結びつきを感じている人々である。その最も熱烈な支持者はムワミの「クライアント」であり、ルケバとその息子たち (Kayitare, Butera) がその中心であった。彼らはいずれもゲリラ活動の先兵であった。第 2 のグループである「進歩派」には、より若く、ヨーロッパ的教育を受けたトゥチのチーフ、サブチーフなどが属していた。彼らは、王党派からは距離を置き、社会主義的な考え方に共鳴していた。例えば、セブエザ (Gabriel Sebyeza) がその例で、キプエに近いブイシャザ (Bwishaza) 首長領のサ

ブチーフだったが、高等教育機関 (Groupe Scolaire) を卒業し、短命だったルワンダ社会党 (Parti Socialiste Rwandais) の創設者となった。その他、亡命したチーフの中では抜群に有能だったカイフラや、ムンガルリレ、ルワンゴンブワなどがそれにあたる。第 3 に、中核にあたる「武闘派 (activist)」で、ここには様々な人的繋がりが存在していた。

1962 年まで、亡命 UNAR の主導権はルワガサナとカイフラに代表される進歩派の手中にあった。いずれも、他のトゥチ指導者に比べて教育を受け、政治的にも洗練されていた。しかし彼らは、62 年 2 月のニューヨーク協定でルワンダのカイバンダ政権と妥協しようとしたために、王党派から不信を招いた。62 年 5 月 17 日には、ルワガサナは政府を支持すると述べたため、進歩派全体が力を失った。

ルワンダの独立 (1962 年 7 月 1 日) が近づくと、亡命政権が樹立された。そこでは、ルケバが首相、ムンガルリレが財務相、セブエザ (Gabriel Sebyeza) が情報相、ベン・サリム (Hamoud Ben Salim) が国防相だった。この亡命政権は、王党派のルケバ、進歩派のムンガルリレ、セブエザといったように派閥横断的であり、また全員が「武闘」にコミットしていた。ただし、リーダーシップは既にルケバの手にあったため、党内では王党派・武闘派的路線が強まっていった。カイフラ、ルテラ (Alexandre Rutera) などの進歩派は政権から離れ、セブエザも 62 年 10 月にカンパラで自身の組織 PSR を旗揚げした。PSR は次第に、アヒシゼ (Théoneste Ahishize)、ルグィザンゴガ (Antoine Rugwizangoga)、カモンデ (Simon Kamonde) などラジカルなトゥチ青年層が指導部を占めるようになり、キゲリ王とは距離を置くようになった。セブエザは 1964 年に筆者 (ルマルシャン) に対し、「王政には絶対に反対」だと述べている。64 年 9 月にセブエザは、ウガンダ政府から公式に禁止された PSR に代わって、国民和解組織 (Organisation pour la réconciliation nationale: ORN) を設立している。

1963 年 5 月には、亡命政権のさらなる分裂があり、首相がカイフラとなった。前亡命政権から残留したのはルケバだけで、彼は国防相となった。ここでも進歩派のカイフラと王党派のルケバ、さらにセバビ (Hesron Sebabi: 前医療補助士で保健相に任命) やキカバヒジ (Barnabé Kikabahizi: 無任所相) などの保守派が入閣していた点では派閥横断的性格が見られた。この間、キゲリ王は様々な派閥とのバランスをとることに努めていた。1964 年末になると、UNAR 亡命政権は、新たな首相であるレベロ (Cosme Rebero: フトゥ) をはじめとした、ムワミの取り巻きの小集団に成り下がってしまった。ルケバは王との接触を断たれ、カイフラは自分が新たに設立した「ルワンダ解放戦線」への支援を得るためにジュネーヴとブリュッセルでほとんどの時間を過ごしていた。セブエザは PSR の活動を止め、ORN の活動に集中していた。ムワミを認めないと公然と主張する者こそいなかったが、王政を本気で再建しようとする者もなく、UNAR は事実上活動を停止していた。

UNAR を崩壊に導いたのは、分派主義、党内の陰謀、個人的なライバル関係であった。その他の要因としては、第 1 に指導者たちの移動が激しく、ヘッド・クォーターを持てなかったことがある。キゲリ王の動きを追ってみると次のようになる。1960 年 5 ~ 11 月

コンゴ、それからダル・エス・サラームへ行き、すぐにニューヨークで UNAR 代表団と合流して、そこに数週間滞在。61 年初頭にダル・エス・サラームに戻る。62 年 10 月カンパラへ発ち、63 年 8 月までブガンダ財務相の賓客としてそこに滞在。その後コンゴ国境に近いダイガ (Ndaiga) に移動し、63 年 11 月には北京へ向かう。北京から帰った後はナイロビに住んだらしい。ムワミの極端な移動癖はリーダーシップの効率的な発揮を妨げ、他のリーダーから嫉妬を招いた。その他に、党運営資金の配分や難民と直接的、継続的な接触を持たなかったことも、運動解体の理由として挙げられている。(Lemarchand, pp.198-206)

中国共産党と UNAR

1963 年 10 月、中華人民共和国はキゲリ王に対して、「技術的」、財政的支援を申し出たといわれている。それより規模は小さいが、同様の支援が自称 PSR リーダーのセブエザにも与えられており、これはキゲリ王に対するクーデタを準備するためのものだった。63 年 11 月にキゲリ王は北京に旅行しているが、これは 10 人のタッチが短期ゲリラ訓練を受けるため招かれた時期と重なる。その後、第 2 陣のタッチ 10 名が 7 ヶ月の訓練を受け、第 3 陣の 10 名が 14 ヶ月の訓練を受けた。

(Lemarchand, p.205)